京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **27** (2008), 23–48

チベット語における「心」「太陽」「月」の方言地理学的分析
——“香格里拉” と *sems kyi nyi zla* の対応に関連して——

鈴木博之

1　はじめに

本稿では、川西民族走廊地域で話されるチベット語方言における「心」「太陽」「月」の３語について、言語地図を作成しつつ語形式、音対応などについて方言地理学的分析を行う。それによってチベット語における方言地理学的研究の注目点を明確にし、かつ地図を利用した議論の一例を示す。

議論に先立って、以上の３語が議論の対象となる背景について簡単に触れておく。

1.1　“香格里拉” をめぐって

現在チベット文化圏最南東端に位置する雲南省迪慶藏族自治州に香格里拉[1]という名称の県[2]が存在するが、これがチベット語文語形式（以下「蔵文」）*sems kyi nyi zla*「心の中の太陽と月」からの音訳という説がある[3]。これは斉扎拉 (2003) によれば、言語学的考察を踏まえたうえで、香格里拉のチベット語方言にのみこの対応が成立するという。しかしその考察過程は明らかにされていない。

上の言及を確かめるには、次の２点について言語学的方法によって示すことができればよい。

1. 各形態素の形式が音訳形式の音価と近似していることの確認

2. その対応関係が迪慶州（及びその周辺）のチベット語に限定されることの確認

[1]「香格里拉」という語は、James Hilton が 1933 年に発表した小説 *Lost Horizon*（『失われた地平線』）に登場する仮想の地名 Shangri-La （シャングリラ）の漢字音写として知られる。

[2]旧称は中甸県であり、チベット語方言研究では今なお旧称が用いられることがある。

[3]詳しい周辺的事情は斉扎拉 (2003) や丁任重主編 (2006)、李菊芳 (2008) などの言及を参照。なお、現在では香格里拉県のことを（特に行政上の場合）チベット文語で *sems kyi nyi zla* と表記することになっている。

この作業は、実際には迪慶州のチベット語方言にのみ注目していては不可能で、広範囲のチベット語諸方言の資料を用いた検討が必要である。このような方法はこれまでのチベット語方言研究においてあまり行われておらず、この問題の検討に取り組むことは研究方法の新しい方向性を示すことになりうる。

1.2　チベット語方言研究における方言地理学的方法

方言地理学的方法によるチベット語方言研究はほとんど存在しない。言語地図を導入して分析を試みたものに鈴木 (2007ad) や Suzuki (2008a) などがあげられるが、方法論の整備や言語地図を描く際の注目点は今なお模索状態にある。したがって、複数の言語地図を作成する過程を通して、チベット語方言における方言地理学的研究に向けた基礎的資料を積み重ねていく必要性がある。

本稿では、上に述べた “香格里拉” をめぐる問題を手がかりに、*sems kyi nyi zla* を構成する形態素のうちの「心」（*sems*）、「太陽」（*nyi*）、「月」（*zla*）の３語を選び、それぞれの方言における形式を分析しつつ、言語地図を描き、チベット語における方言地理学的研究の方法について考察する。また、この議論を通して得られた結果は上に提示した “香格里拉” に関する問題の検討に役立つものであるため、これについて一定の見解も述べることにする。

議論の対象はチベット文化圏東部にあたる川西民族走廊地域で話される方言とする。この地域の方言資料の大部分は筆者が自身のフィールドワークを通じて収集したものであり、一定の蓄積がある。本稿では筆者が現地調査によって得た資料を中心に議論するが、適宜先行研究に提供される方言資料も参考にする。

川西民族走廊地域に分布するチベット語諸方言は、鈴木 (2007a:22–32) などに示されるように、極めて多様な特徴を有し、その差異も小さくない。その詳細をここで全て繰り返すことはしないが、大きく分ければアムドチベット語、ヒャルチベット語、カムチベット語の３種が話されている。この多様性について、先行研究で全体像が明らかにされているとは言いがたく、現段階ではおおまかな輪郭が判明したに過ぎない。より狭い地域についてもチベット語方言の分布は正確には把握されていない。先に掲げた問題でもっとも注目される迪慶州は、カムチベット語の諸方言が分布する地域である[4]が、そこに分布する方言の下位分類においても意見が錯綜している。その中で鈴木 (2008b) は迪慶州全域の方言資料に基づいて言語学的基準による下位分類を明らかにしたが、この地域では主要なものとして３種の下位方言が設定される。ところがこの状況に照らして、方言の詳細を知りうる記述的研究は量的

[4]ある形式が特定の方言にのみ見られるといった現象が確認されるためには、対象とする複数の方言に相当の差異がなければならないが、その意味で議論の対象に川西民族走廊の方言を設定するのは問題ない。

に十分ではない[5]。

このような研究状況において、言語地図を作成することは方言の多様性を簡単に展望することを可能にし、それぞれの言語特徴の分布状況を明らかにすることができる。また、諸方言の共通点と相違点を知るのにきわめて有用であるといえる。

1.3　チベット語方言研究と “香格里拉”

Suzuki (2008bc) などのチベット語方言研究では、「香格里拉（Shangri-La）」を特定のチベット語諸方言（もしくはその分布地域）をさすものとして用いている。その対象地域は迪慶州自体とそれを取り巻く地域まで含み、同地域で話される方言をひとまとめに取り扱うことに意味があるとしている[6]。このような点で “香格里拉” という地域概念はチベット語方言研究ですでに議論されている。

上述のチベット語方言研究における「香格里拉（Shangri-La）」が、県名である香格里拉とは異なるものであることは明らかであるが、後者に関して冒頭で述べたように、言語学的に十分議論がなされていないならば、それについて広範な方言資料を用いて意見を提出しておくことは決して意義の小さいものではない。

なお、“香格里拉” を蔵文 *sems kyi nyi zla* からの音写と考えるならば、その漢字音写の示す音についても若干の説明が必要である。各漢字に普通話での分節音形式を逐次的に添えると、「香 ɕiaŋ / 格 kɤ / 里 li / 拉 la」となり、それぞれの音節が蔵文の要素と対応する関係にある[7]。

以下、「心」「太陽」「月」の３語それぞれに各１節をあて、諸方言での形態、言語地図を用いた分布の考察を行う。これらはそれぞれ独立した議論である。最後に、まとめの考察を行う。

---

[5]迪慶州のチベット語方言は、Zhang (1996) の記述から数地点で調査が行われたと推測できるが、rGyalthang 方言１種のみがよく研究されている。rGyalthang 方言の先行研究には、陸紹尊 (1990, 1992)、Hongladarom (1996, 2007)、《中甸県誌》(1997:147–153)、《雲南省誌》(1998:421–441)、鈴木 (2007a:181–186) などがある。rGyalthang 方言以外の迪慶州のチベット語に関する研究には、鈴木 (2007a:187–202, 2008a) や鈴木&ツェリ・ツォモ (2007)、Bartee (2007) などがある。

[6]“香格里拉（Shangri-La）” としてひとくくりにされる地域は、おおよそチベット伝統の地域名 *sPo-’bor-sgang*（*smad-mdo-khams sgang drug* の１つ。《藏漢大辭典》(1993:1664) 参照）に対応しうるという。また、現代において “香格里拉” を自称する地域が迪慶州以外にも複数あり（丁任重主編 2006）、その地域もほぼすべてここでいう「香格里拉（Shangri-La）」に含まれている。

なお、本稿では上述の地域で話される方言をほぼ全て扱っている。ただし “香格里拉” を自称する地域の１つである怒江傈僳族自治州貢山独龍族怒族自治県丙中洛郷のチベット語方言は筆者が未調査であり、その方言を記述した資料も存在しないため、含めていない。

[7]この対応を見ると、漢字「里」が蔵文 *nyi* と対応関係にあるため、初頭子音についてこの漢語は/l/と/n/を弁別しない四川漢語など西南官話に類する特徴を備えていると判断できる。

2　「心」

2.1　語形式についての分析

「心」のチベット語方言形式を見ると、語根の異なる複数の形式がある。そもそも蔵文に *sems* のほか *sems pa*、*snying* といった複数の形式が存在し、方言によっていずれの対応形式を用いるかが異なっている。

これらそれぞれの形式には、主に「精神・心」の意味と「心臓」の意味がある。チベット語方言の中には、「心」と「心臓」の間に語形式に差があるものとないものがあるが、大抵の方言は上に示した蔵文形式に対応する口語形式を複数持つ。これら複数の形式の用法は語義によって区別されているというよりは、むしろ語彙的に固定した表現がそもそも存在し、それによってそれぞれの形式が使い分けられるように見える[8]。

まず、以下に諸方言において単に「心」の意味で用いられる語形式をまとめていく。語彙形式が複数ある方言では、一般的に用いられると調査協力者が判断したものを掲げる[9]。

蔵文 *sems* 対応形式

蔵文 *sems* 対応形式は、それぞれの母音の質によって、狭母音をもつものと広母音をもつものに分けて例を挙げる。

狭母音をもつもの

Askyirong 方言 s^hem

rNgawa 方言 s^hem

[8] この使い分けが存在する方言では、基本的に心理状態が喜びを表す場合（「うれしい」「楽しい」など）は蔵文 *sems* 対応形式を、悲しみを表す場合（「悲しい」「心が痛む」など）は蔵文 *snying* 対応形式を用いる傾向にある。

[9] ただし、一部先行研究の記述を利用するものがある。
なお、筆者の調査記録によるもので、超分節音素に関する表記は以下のようである。

1. 声調の表記（カムチベット語）

¯: 高平　　´: 上昇　　`: 下降　　ˆ: 上昇下降　　_: 低平

2. レジスターの表記（ヒャルチベット語）

˚: 緊張レジスター　　（無標）: 弛緩レジスター

超分節音素は語単位でかぶさるため、以上の記号を語頭に付して表す。
また、チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京 (2004:379–390) を参照。

Phyugtsi 方言 s^{h}iː

Zhongu 方言[10] se

Zulung 方言 ˉs^{h}ĩ

Thoteng / Budy (Lothong) / Yanmen / nJol / gYagrwa / sPomtserag 方言 ˉs^{h}ẽ

Byagzhol 方言 ˉs^{h}ej

Daan 方言 `ɕ^{h}ĩ

広母音をもつもの

Babzo 方言 s^{h}ɔː

sKyangtshang 方言 ˚s^{h}ɑŋ

Thangskya 方言 sɑ̃ː

Grupalung 方言 ˉs^{h}ɛː

gTorwa 方言[11] `s^{h}ɑ̃

rGyalthang 方言 ˉɕã

mThachu (Qidzong) 方言 ˉsɔ̃

蔵文 *sems pa* 対応形式

蔵文 *sems pa* 対応形式は現段階で２つの方言にのみ確認されるが、上の蔵文 *sems* 対応形式と同様、２方言ではあるが第１音節の母音の質がそれぞれ異なっている。

gZari 方言 s^{h}ẽ ^{m}bɯ

Hamphen 方言 ˚s^{h}ã ^{m}ba

蔵文 *snying* 対応形式

Ketshal 方言 ˚ɲiŋ

Lhagang 方言 `ɲ̊ĩ / `ɲ̊i

Rangakha / Nyayulzhab / Sagong / gDongsum / Rwata / Grongsum 方言 ˉɲ̊ĩ

dMarthang 方言 ^{s}ɲ̊əŋ

Mroha 方言 sɲiŋ

[10]Zhongu 方言の形式は Sun (2003) による。

[11]gTorwa (Pongding) 方言を扱う Bartee (2007) には s^{h}ã^{53} が記録されていて、筆者の記録（gTorwa (Phula) 方言）と近い形式である。

sProsnang 方言 ˉn̥ĩː

Sogpho / Sabde / sDerong 方言 ˋn̥ĩ

dGudzong 方言 ˋn̥ɔ̃

nDappa 方言 ˉn̥iʔ

Yanmen 方言 ˉn̥ẽʔ

Melung 方言 ˉn̥uŋ

以上にまとめた対応形式のうちには、各方言で完全には対応しないと考えられるものも含めている。たとえば蔵文 *sems* 対応形式の初頭子音で、Daan 方言の形式 ˋɕʰĩは同方言で前舌狭母音に歯茎摩擦音 [s] が先行しないため通常の対応関係といえる[12]が、rGyalthang 方言 ˉɕã が蔵文 *sems* に対応すると判断するのは並行例がないため難しく、初頭子音が [s] で現れないのは例外的とみなせる[13]。Byagzhol 方言 ˉsʰej や Grupalung 方言 ˉsʰɛː のような鼻音要素を伴わない例についても、完全に蔵文 *sems* と対応しているとはいえない[14]。

また、蔵文 *snying* 対応形式として示した例について、Lhagang 方言 ˋn̥i で母音が鼻母音でないのは、同方言では他にもいくつか同様の例[15]があり規則性のある音対応と考えられるが、nDappa 方言 ˉn̥iʔ や Yanmen 方言 ˉn̥ẽʔ で末子音に声門閉鎖音が現れる現象は、蔵文から説明がつけられない。

2.2　言語地図を用いた考察

以下に「心」の言語地図を２種類描く[16]。１つは語形式の差異を基準にしたもので、もう１つは蔵文 *sems / sems pa* 対応形式に限って、その母音の質を基準にしたものである。

まず、語形式の差異を基準にした地図を示す。

[12]Daan 方言における他の例として、ˋʰɕiː「金」（蔵文 *gser*）や ˋɕʰi ɕʰi「黄色い」（蔵文 *ser ser*）などがある。

[13]rGyalthang 方言の母語話者であるチベット人の中には、ˉɕã という形式が蔵文 *brang*「胸」と対応すると考えている人がいるとのことである（Ellen Bartee 氏との個人談話）。

[14]しかしながら、たとえば Phyugtsi 方言 sʰiː や Zhongu 方言 se において鼻音要素が現れないのは、各方言の音体系や蔵文との対応を考えると、問題のない現象といえる。

[15]鈴木 (2006:43) にこの現象が指摘されており、その記述ではほかに ˉⁿdu「読む」（蔵文 *'don*）、ˊⁿdza ᶠʰli「世界」（蔵文 *'dzam gling*）、ˉʰn̥ɯ「油」（蔵文 *snum*）が例としてあがっている。

[16]本稿で用いる言語地図に記載される地点に関する必要な情報は本稿末尾に添えた。方言の地点に関する行政区分上の位置など詳細な情報は鈴木 (2007b:55–56) に掲載されている。

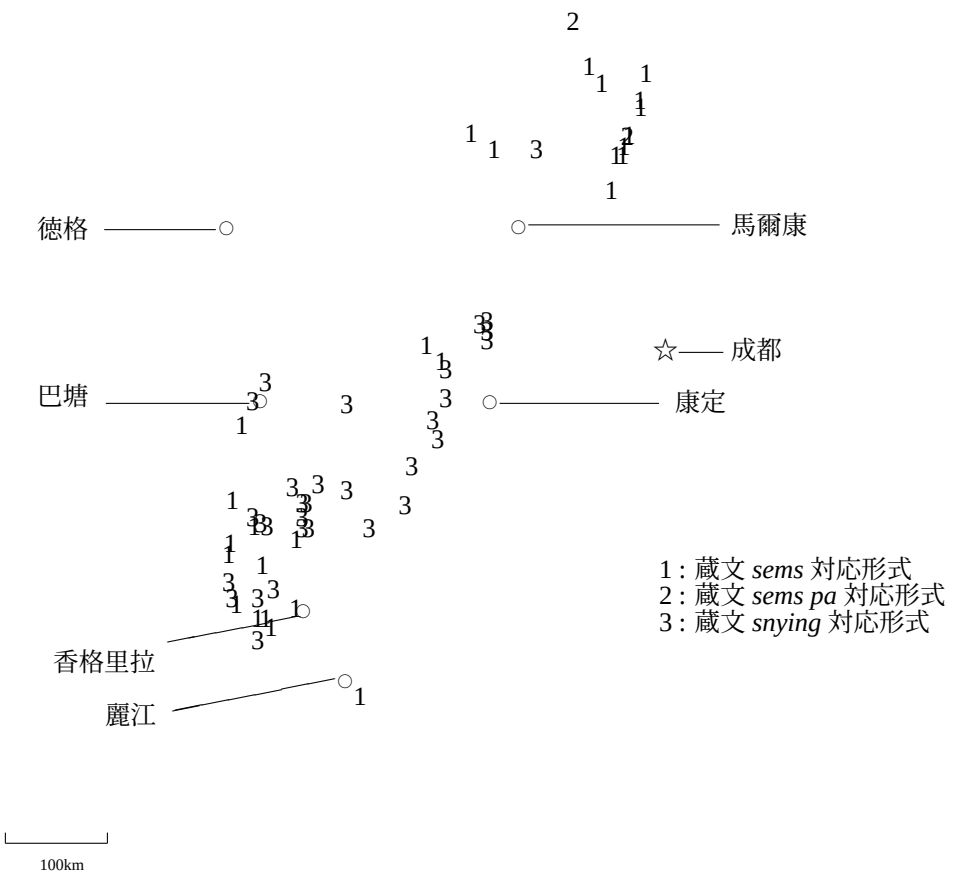

図 1: 「心」の語形式言語地図

分布としては、蔵文 *sems* 対応形式がおおよそ地図に示した南北の両端にかたまっていることに注目できる。北部の蔵文 *sems* 対応形式を示す方言はアムドチベット語とヒャルチベット語である。その中には、上の地図からも分かるように、蔵文 *sems pa* 対応形式をもつ方言も少数ある。一方で南部の蔵文 *sems* 対応形式を示す方言は、迪慶州で話されるカムチベット語の一部が該当する。中部のカムチベット語では蔵文 *snying* 対応形式が用いられるのが主流であると分かるが、それを考えると南部で蔵文 *sems* 対応形式をもつのが際立つ語彙的特徴であるといえる。

次に、蔵文 *sems / sems pa* 対応形式に限った場合の、その母音の質を基準にした地図を示す。

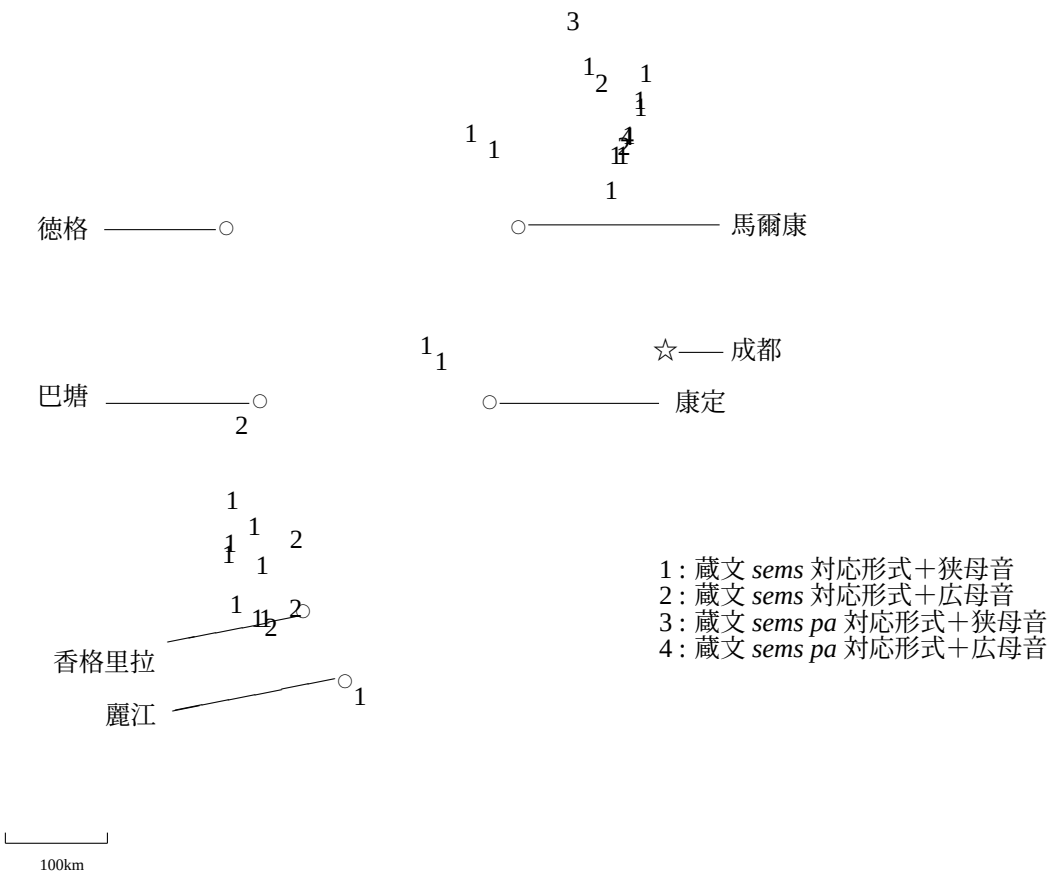

図 2: 「心」の蔵文 *sems / sems pa* 対応形式の母音言語地図

地図北部と南部の両方に狭母音、広母音の違いがあることが確認できる。現段階では、それぞれの地域において母音の差異と地域的な近さには関連性を見出せない。この関連性についての議論は、さらに細かな地点の資料が必要である。

さて、この点と関連するのは、18 世紀の川西民族走廊のチベット語方言を記録した《西番譯語》４種の「心」に関する記録である。北部地域・松潘周辺のチベット語の記録である〈川一〉には広母音形式が記録されている。中部地域・康定周辺のチベット語の記録である〈川六〉〈川七〉では、前者が狭母音形式、後者が広母音形式を記録しているが、現在の分布とはそもそもの語形式が異なっていて、これらの記録とは合致しないようである。南部地域・木里周辺のチベット語の記録である〈川九〉には狭母音形式が記録されている[17]。〈川一〉の記録については、現在もなお近隣に広母音形式をもつ方言があるため、記録された方言と歴史的な関連が存在する可能性がある。

[17] ４種《西番譯語》に記録される漢字音写の具体的な形式と推定音価は次のようである。〈川一〉桑 *saɴ、〈川六〉生母 *sem / *seɴ ᴺbu、〈川七〉桑巴 *sɑɴ pa、〈川九〉性 *siɴ。
各推定音価は鈴木 (2007b:162–163) に示される手順によって、筆者自身が与えた。

3 「太陽」[18]

3.1 語形式についての分析

「太陽」のチベット語方言形式は、おそらく蔵文 *nyi ma* にのみ対応する形式を用いると見られるが、それがどのような音声形式をもって実現されるかが問題である。

この語の口語形式には、２音節で現れる方言と１音節で現れる方言が存在する。

２音節形式

２音節形式では、第２音節の初頭子音の形式が注目に値する。蔵文と比べると、/m/ をもっているのが標準的な形式とみなせるが、中には /w/ や /ɦ/ をもった形式がある。以下にそれぞれいくつか例を挙げる。

1. 第２音節初頭が /w/ のもの
   gZhungwa 方言 ȵi wɔ
   Hamphen 方言 ȵi wɑ̃
   Lithang 方言 ˆȵə wa
   Chaphreng / Nyersul / Ragwo / Rwata 方言 ´ȵi wɔ̃
   sDerong 方言 ´ȵĩ wɑ̃
   sPunsum / gTorwa / Yanmen / rGyalthang 方言 ´ȵi wɑ̃

2. 第２音節初頭が /ɦ/ のもの
   gTsangtsa（達基寺）方言 ȵə ɦa
   gTsangtsa（干海子）方言 ȵi ɦã

以上の例にも見られるように、第２音節の母音が鼻母音で現れるものがある。これは第２音節初頭子音に /m/ をもつものでも確認される。たとえば、以下のようなものがある。

Thangskya 方言 ˚ȵi mã
Rongbrag 方言 ˆȵi mɔ̃
nDappa 方言 ´ȵə mõ
sPomtserag / Byagzhol 方言 ´ȵi mã
mThachu (Qidzong) / Zulung 方言 ´ȵi mɑ̃

[18]本節の一部は、鈴木 (2007a:345) に議論されている。

１音節形式

１音節形式には、大きく分けて２種類ある。

１つは、２音節形式が単純に縮約したと分析できる例で、以下のようなものがある。

Nyayulzhab / Sagong / Mairi 方言 ´ȵõː
Yungling 方言 ´ȵãː
Grupalung 方言 ´ȵɑ̃ː
gYagrwa 方言 ´ȵaː

いずれも母音が長母音で現れることに注目できる。これは同じ方言の他の語の蔵文対応形式と比較することによって、容易に想定できる音変化の１つである[19]。

もう１つは、母音がやや特殊になっているものである。Phyugtsi 方言では ȵʉɵː / ȵʉeː という。これは蔵文対応形式とは異なり、音形式としてはペマ語[20] ȵyɛ^{35}（平武方言、勿角方言に共通の形式）と近い。平武方言には ȵi^{35}mɑ^{35} もあり、これが蔵文 *nyi ma* に対応するため、前者をペマ語の本来語と考えることができ、それに Phyugtsi 方言の形式が近いということになる。

その他

Serpo 方言 nɑ ^{x}tsa は来源不明の形式である。

3.2　言語地図を用いた考察

「太陽」の言語地図は、口語形式を基準に描く。

[19] この現象は、郷城県および迪慶州瀾滄江流域の方言にも見られる（鈴木 2008a）。
[20] ペマ語の形式は孫宏開等 (2007) による。

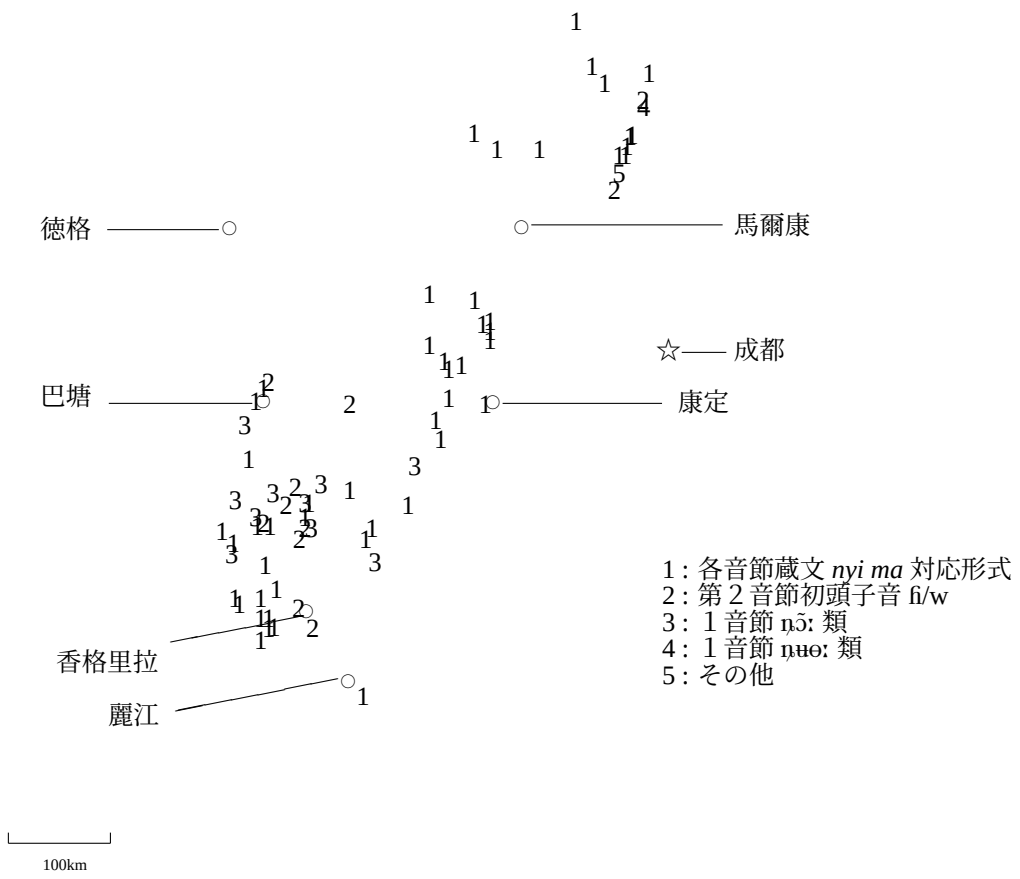

図 3: 「太陽」の語形式言語地図

第 2 音節初頭子音が ɦ や w となるものは、その音節の母音が多く鼻母音として実現される。それが 1 音節化した場合に ɲõː といった形式になると見られる。地図南部で 1 音節形式が集中しているのは郷城県の諸方言であるが、ここではまさにこの変化が起こっているものと見ることができるだろう。

Phyugtsi 方言 ɲuɵː / ɲueː はペマ語の形式 ɲyɛ^{35} と近い。母音の質を見ると借用語と考えられるが、この点はさらに精査する必要性がある。この方言の近隣の方言を見ると、gTsangtsa 方言では ɲə ɦa で、さらに上の地図には示していないが、同方言の分布する地域の南に位置する漳扎鎮干海子村の方言は ɲi ɦã、さらに南に位置する地域で話される sKyangtshang 方言が ɲə ma であることを考えると、交通路沿いに徐々に蔵文 *nyi ma* 対応形式から 1 音節形式へと移行しつつあるような分布を見せていることが指摘できる。これは郷城県周辺の方言とやや共通性を見せている。

4 「月」[21]

4.1 語形式についての分析

「月」を表すチベット語方言形式は、大別するならば蔵文 *zla ba* もしくは *zla dkar* の２つの対応形式になる。このとき、語形式がいずれに一致するのかという点とともに、どのような音声形式をもって実現されるかの２点に興味が集約される。

4.1.1 蔵文との形態素の対応

各方言の形式が蔵文 *zla ba* と *zla dkar* のどちらに対応するのか、また、それ以外の来源をもつものを用いるかなどについて分析する。

蔵文 *zla ba* 対応形式

蔵文 *zla ba* 対応形式が現れる方言には、以下のようなものがある。

gZari 方言 ʱda wa
Zhongu 方言 dɐ wɐ
rNgawa 方言 ʱda wa
sProsnang 方言 ˆʱdza wə
dGudzong 方言 ˉʱda wo
Lhagang 方言 ˆʱda wa
Rangakha 方言 ´da ɦa
Jieju 方言 ˆʱda wo
Morim 方言 ˆʱdza wa
Lithang 方言 ˆʱda wa
mBathang 方言 ˆⁿda wa
nDappa 方言 ´ⁿda ɦo
Sanba 方言 ´ʱdə wa
Melung 方言 ´ⁿlɑ wa

蔵文 *zla dkar* 対応形式

蔵文 *zla dkar* 対応形式が現れる方言には、以下のようなものがある。

[21]本節の一部は、鈴木 (2007a:330–331) に議論されている。

Yanmen 方言 ´ji ga[22]

Budy 方言 ´lə ka

mThachu (Qidzong) 方言 ´ⁿla gɛː

Ragwo 方言 ´ⁿlə ka

Chaphreng 方言 ´ⁿlə kɛː

Sagong 方言 ´ⁿda kɛː

mTshola 方言 ¯la γa

Sowanang 方言 ˆⁿda ʰkɛː

Grongsum 方言 ˆda ʰka

Babzo 方言 ʱtsa ʰka

gTsangtsa 方言 ʱdza γa

Phyugtsi 方言 ʱdza γɐ

mBathang 方言については、現在では上の蔵文 *zla ba* 対応形式である ˆⁿda wa が用いられるが、格桑居冕 (1985) の記述では「月」は nda˩γɑ˥（筆者の記述法では ´ⁿda γɑ となる）が記載されている。しかし、現在の若年層ではこの形式は用いないし、聞いて理解もできないという。老年層でもあまり用いないが聞いたことがあるとするため、年代差である可能性が高い[23]。

音節の縮約形式

蔵文形式と異なり、１音節で現れる方言がある。たとえば、以下のようである。

Ketshal 方言 ʱdzaa

Askyirong 方言 °ʱtsaː

Mroha / Gongrima 方言 ʱdzɑ

Nyayulzhab 方言 ´ʱdoː

gYagrwa 方言 ¯ⁿlɑ̃ː

アムドチベット語を除いて、基本的に母音は長母音で現れるようであり、これが音節縮約によって現れたものと見てよい[24]。

[22]初頭子音が /j/ であるものが蔵文 *zla* に対応するといえるのは、蔵文 *la* 自体が /j/ に対応する方言が存在し、かつそのような方言に見られるということを根拠とする。詳しくは鈴木 (2008a) を参照。

[23]筆者の mBathang 方言の調査協力者は格桑居冕氏の親戚であり、同氏の実家で調査を行い家族内で複数の人に確かめたのであるから、方言差（地域差）を積極的には認めがたい。

[24]アムドチベット語は一般に母音の長短が弁別的でない。上記 Mroha / Gongrima 方言の場合、母音の質が後舌になっている点に音節縮約の現象を認めることができる。

また、Babzo 方言には１音節の ᶠtsɑː の形式とともに２音節の ᶠtsɑ ʰka もある。この方言の場合、「月」には蔵文 *zla dkar* 対応形式の縮約によって１音節形式が成立したと見当がつく。ほかにも sPunsum 方言では１音節 ⁻ⁿlɑːのほか、⁻ⁿla ɦa も⁻ⁿla gɛːも用いるが、１音節形式は ⁻ⁿla ɦa の縮約という[25]。しかし、１音節語のみを用いる方言について、蔵文 *zla ba* あるいは蔵文 *zla dkar* が縮約したものであるのか、それとも蔵文 *zla* と他の要素が縮約したものであるのかは、１つの方言内で説明することが難しい。

その他

Sogpho 方言 ˊᶠda ɲõ は、第１音節が蔵文 *zla* の対応形式と考えられるが、第２音節は来源が不明である。

Hamphen 方言 ˊᶠdza ɦa は、第１音節が蔵文 *zla* の対応形式と考えられるが、第２音節が蔵文 *ba* か *dkar* かどちらに由来するかは決定できない。

Muli 方言 ⁻ᶠlɔʔ や mPhagri / Zholu 方言 ⁻ⁿlɔʔ は、蔵文 *zla* と関連する形式であると考えられるが、音節末の声門閉鎖音の来源は不明である。

mThachu 方言 ˊⁿlɛ ᶠgɛː ˉmɔ̃ は第１、第２音節が蔵文 *zla dkar* の対応形式と考えられるが、第３音節は来源が不明である。

Daan 方言 ˆlɯ gɯ̃ は蔵文 *zla dkar* と関連する形式であると考えられるが、第２音節の鼻母音が何に由来するのかは不明である。

4.1.2　語頭子音による分類

先に掲げた例からも分かるように、方言によって「月」の語頭子音は多様である。このため、各方言における口語形式について、語頭子音によって分類して掲げる[26]。

/d, ᶠd/ を含むもの

gZari 方言 ᶠda wa

rNgawa 方言 ᶠda wa

[25]調査協力者の判断による。ただ、音声学的観点から分析しても、この判断は妥当であるといえる。

[26]同一の *zla* という形態素でも「天体の月」と「年月日の月」では口語形式の初頭子音が異なる場合がある。以下に掲げるのは「天体の月」のほうである。語義によって初頭子音が異なるのは、「年月日の月」が他方言もしくは文語読書音からの借用語であるため、と分析できる方言もある。

Lhagang 方言 ˆ^{ɦ}da wa
Rangakha 方言 ´da ɦa
Jieju 方言 ˆ^{ɦ}da wo
Nyayulzhab 方言 ´^{ɦ}doː
Lithang 方言 ˆ^{ɦ}da wa
Nyishe 方言 ´da wa
Sanba 方言 ´^{ɦ}də wa

/^{n}d/ を含むもの

Rwata 方言 ´^{n}da wɔ
gYagrwa 方言 ´^{n}dɑ wa
rGyalthang 方言 ´^{n}da wɑ
Sagong 方言 ´^{n}da kɛː
Grupalung 方言 ´^{n}da wa
Sowanang 方言 ˆ^{n}da ^{h}kɛː

/l, ^{ɦ}l/ を含むもの

Budy (Jieyi) 方言 ´lə ka
Budy (Lothong) 方言 ¯lə ka
Muli 方言 ˭^{ɦ}lɔʔ
mTshola 方言 ¯la ɣa
Daan 方言 ˆlɯ gũ

/^{n}l/ を含むもの

nJol 方言 ´^{n}lɑ wɑ
Budy (Lothong)[27] / Melung 方言 ´^{n}lɑ wa
Yungling / Thoteng / gDongsum 方言 ´^{n}la wa
Byagzhol 方言 ´^{n}la gɛː
mThachu (Qidzong) 方言 ´^{n}la gɛː

[27]Budy (Lothong) 方言には２種類の形式がある。

gTorwa 方言[28] ˉⁿla gɛ
mPhagri 方言[29] ´ⁿla gɛː / ˉⁿlɔʔ
Zulung 方言 ˉⁿlɑ̃ː

/ᵐl/ をもつ方言のいくつかについて、注目すべき現象がある。それは、口語形式も文語読書音もともに共通の /ᵐl/ となるが、同一語が人名に用いられたときに初頭子音が /d/ になる現象である。たとえば nJol 方言の場合、「月」は ´ⁿlɑ wɑ であるが、人名に用いられると ´dɑ wɑ になる。この現象について、調査協力者は人名の場合の音形式を雅語[30]に由来するが口語音であるとし、一般的な文語読書音であることを否定する[31]。

/j/ を含むもの

Yanmen 方言 ´ji ga
sPomtserag 方言 ´jɛ ʱgɛ

/dz, ʱdz, ʱts/ を含むもの

Hamphen 方言 ʱdzɑ ɦɑ
gTsangtsa 方言 ʱdza γa
Phyugtsi 方言 ʱdza γɐ
Askyirong 方言 °ʱtsaː
Babzo 方言 ʱtsɑː
Mroha 方言 ʱdzɑ
sProsnang 方言 ˆʱdza wə

/dz, ʱdz/ と /ʱts/ は有声性の点で異質であるように見えるが、後者は特定の方言の蔵文に対する特別な音対応として明らかにされている（鈴木 2007c）ため、これらをひとまとめにした。

以上に分類した音形式は、歴史的観点から見ていかなる発展によって生じたものであるかといった問題は極めて興味深いものではあるが、これに関する議論はきわめて複雑であるため、別稿にゆずることにする。

[28]Bartee (2007) には lə^{55} gæ^{53} が記録されている。
[29]mPhagri 方言には２種類の形式がある。
[30]雅語音は主に詩や歌に用いられる。
[31]実際、つづり字 *zla* を読み上げる際の音は /ᵐl/ である。

4.2　言語地図を用いた考察

以下に「月」の言語地図を２種類描く。１つは蔵文対応形式を基準にしたものであり、もう１つは口語形式の初頭子音による分類である。

まず、蔵文との対応形式の地図を以下に示す。

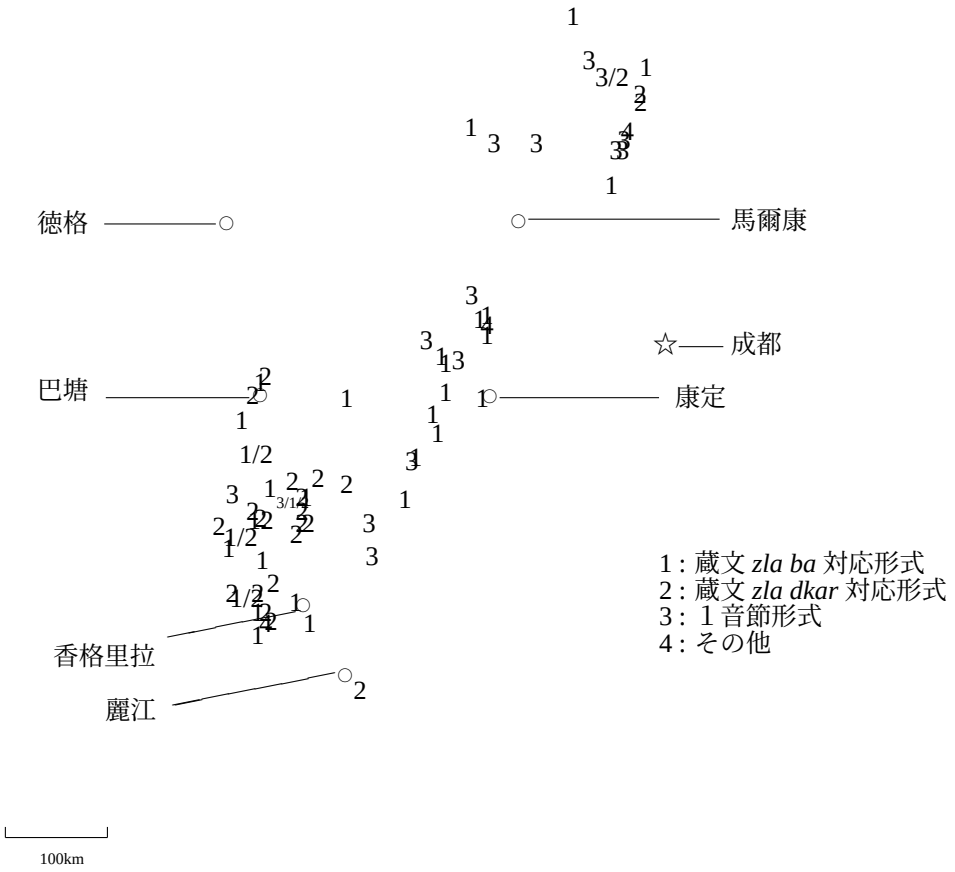

図 4: 「月」の蔵文対応形式言語地図

蔵文 *zla ba* 対応形式はほぼ全ての地域に見られるため、蔵文 *zla dkar* 対応形式が現れる方言に注目すると、地図南西部を中心として Budy 方言 ´lə ka、Ragwo 方言 ´^{n}lə ka、Chaphreng 方言 ´^{n}lə kɛː、Sagong 方言 ´^{n}da kɛː、mTshola 方言 ¯la γa、Grongsum 方言 ˆda ^{h}ka があり、地図北東部を中心として Babzo 方言 ^{ɦ}tsa ^{h}ka、gTsangtsa 方言 ^{ɦ}dza γa、Phyugtsi 方言 ^{ɦ}dza γɐ などがあり、北部と南部に分布している[32]。

また、１音節で現れる方言について、特に地図中北東部に集中している地域（松潘県が主）では、周辺に分布する Babzo 方言に見られる２音節形式との交替や、いくつかの方言における第２音節初頭が γ となる例の存在から見て、蔵文 *zla dkar* の

[32]mBathang 方言ではかつては蔵文 *zla dkar* に対応する形式を用いていた。この形式は分布としては mTshola 方言と並んでいるため、特別な形式とみなす必要はないだろう。

２音節が縮約したものと考えることができる方言がある。ただし *zla ba* 対応形式も見られるから、必ずしも断定できるものではない[33]。

次に、「月」の初頭子音に関する地図を示す。

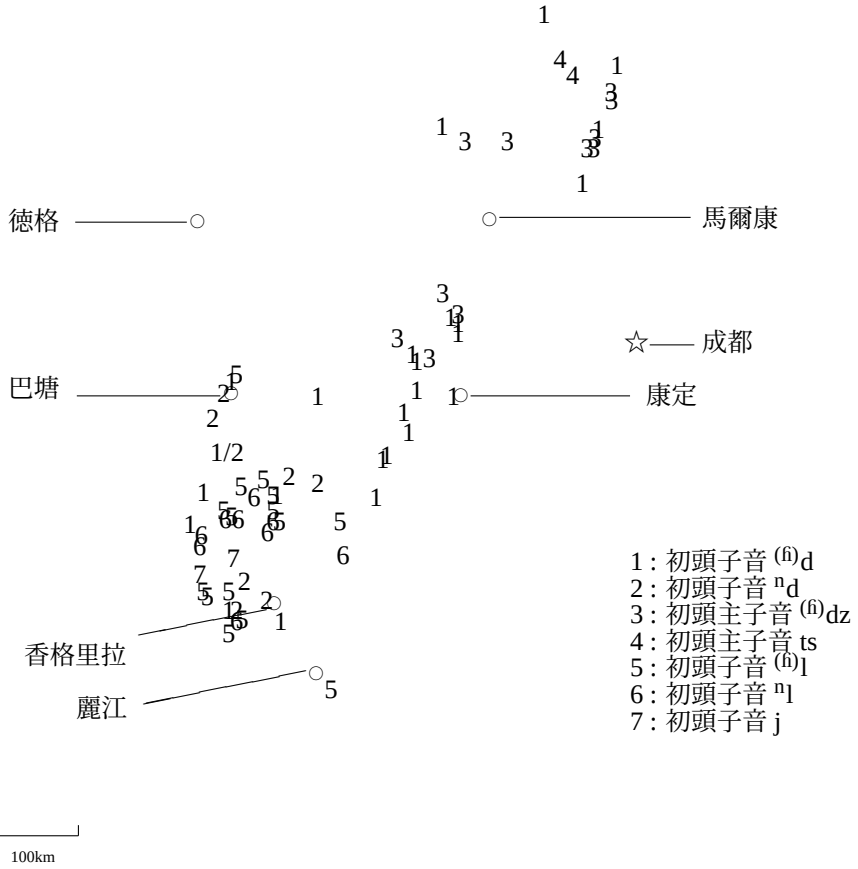

図 5: 「月」の初頭子音言語地図

地域的に対応形式にはまとまりがあるように見える。たとえば、地図上の北部では歯茎破擦音が、中部では前鼻音を伴わない歯茎閉鎖音が、南部では歯茎流音か前鼻音を伴う歯茎閉鎖音が現れる。特に前鼻音を伴う２組 /ⁿd, ⁿl/ は、主子音が異なるにもかかわらず、地図南西部にかたまっている点に注目できる。

以上の観点から考えると、gZari 方言 ᶠʰda wa や Zhongu 方言 dɐ wɐ、rNgawa 方言 ᶠʰda wa、sProsnang 方言 ˆᶠʰdza wə、Morim 方言 ˆᶠʰdza wa、mBathang 方言 ˆⁿda wa、mTshola 方言 ˥la γa[34]、Sagong 方言 ˊⁿda kɛː、nDappa 方言 ˊⁿda ɦo、Budy (Jieyi) 方言 ˊlə ka などの形式は分布上周辺の方言形式と異なって、際立っている。

[33] 18 世紀の松潘周辺のチベット語を記録する《西番譯語》〈川一〉の記載によると、「月」の音写漢字は「雑瓦」（漢字の表す分節音の推定音価は /tsa ua/）で、語頭子音が dz/ts を示したと考えられ、第２音節は蔵文 *ba* に対応する形式を示している。

[34] 巴塘県の方言は何が基本的な形式か現段階では不明であるため、並列してあげておく。

5　まとめ

以上、「心」「太陽」「月」の３つの語について、それぞれの語形式の考察と言語地図の作成を通して方言地理学的考察を行った。

まず、チベット語の方言地理学研究の方法に関する考察結果をまとめると、「心」「太陽」「月」の３語は言語地図を描く際に蔵文と比較するとそれぞれ次のような異なった特徴が問題とされた。

1. 「心」
   語形式の異なりに加え、それぞれの音形式にも異なりが認められる。

2. 「太陽」
   同一の語源に遡ることができると考えられる中で、音形式の異なりが認められる。

3. 「月」
   同一の語源に遡ると考えられる形式を主要部とし、かつ異なる語構成をもつ形式が認められ、加えて複雑かつ多様な口語対応音が認められる。

次に、言語地図に現れた現象を踏まえて、“香格里拉” と蔵文 *sems kyi nyi zla* との対応関係について判明した点を述べる。もっとも注目できるのは第１要素「香 ɕiaŋ」と *sems*「心」の方言形式の関係で、これが音形式上うまく対応しているのは rGyalthang 方言のみであることが分かった。「心」に *sems* 対応形式を用いる方言には、ほかにも阿壩州北東部一帯にも見られるが、「太陽」*nyi* と「月」*zla* の関係を見ると、特に後者については迪慶州の諸方言のみに /da, ^{ɦ}da, ^{n}da, ^{n}la, la/ が対応し、それが漢字「拉 la/na[35]」と対応関係にある。これらのことから、“香格里拉” は迪慶州で話される方言にのみ限定的に蔵文 *sems kyi nyi zla* の口語音と対応するということは、言語学的観点から確かに成立しているといえる[36]。

チベット語の方言地理学的研究は、実質未開拓の分野といってよいため、いかなる特徴に留意し、何を示すことができればいいのかといった基本的な課題さえも見

[35] もし漢字の音価に四川漢語のような西南官話音が反映されているならば、この字音の音声実現には少なくとも [la, na, ^{n}da, ^{ɦ}da] が含まれる。

[36] 本稿では蔵文 *kyi* に当たる要素について扱っていない。これは蔵文 *kyi* が助詞であり、これに対応する口語形式が１方言の中でも音声学的に一定しておらず、本稿で行ったような方言地理学的観点からの取り扱いには十分な注意が必要と考えたためである。
なお、迪慶州で話される方言において蔵文 *kyi* の対応形式には、[kə, gə, γə] などがある。また、Hongladarom (2007:125) は rGyalthang 方言の属格助詞として /kə/ を認めている。
このことから、迪慶州で話される方言について “香格里拉” は全音節について蔵文と口語音が対応しているといえる。

出すことに困難がある。鈴木 (2007d) は言語地図を利用したチベット語方言研究ではあるが、従来方言地理学で扱われてきた研究対象とは異なって、チベット語方言の多様性を強調している側面がある。これは議論の焦点が特定の語彙であったことに起因しているが、このような方言間の多様性も明らかにされる必要があるといえる。ただし、他言語においてなじみのある方言地理学的分析が生かされるような面もあるはずであり、本稿で扱った３語にはそれぞれ様相の異なる事例が含まれていて、その点においてチベット語方言研究にとって興味深い結果を得られたと考える。

一方で、言語地図にはある現象 / 特徴が特定の方言に限定されるということを明らかにさせる効果がある。本稿で議論の手がかりとした “香格里拉” をめぐる問題は、多くの方言資料を一度に提示できる言語地図を用いることによって検討されるべきタイプの問題であったといえるだろう。ただし、さらに精密な分析を行うには、言語地図に記載する地点数（方言数）を増やし、資料としての価値もさらに高めることが求められる。

本稿で行った３語の分析によって、チベット語方言地理学にとって注目すべき点を素描することができたと考える。

参考文献

鈴木博之 (2006)「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号 39–47

—— (2007a)『川西民族走廊・チベット語方言研究』京都大学博士論文

—— (2007b)「丁種本《西番譯語》〈川六〉に記録される 18 世紀木坪チベット語の特徴」『内陸アジア言語の研究』XXII, 157–180

—— (2007c)「チベット語包座 [Babzo] 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 74 号 101–120

—— (2007d)「川西民族走廊・チベット語方言における「ぶた」を表す語」『京都大学言語学研究』第 26 号 31–57

—— (2008a)「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第 37 号 115–124

—— (2008b)〈迪慶藏語是康巴藏語中的 “一個” 次方言嗎〉《康定民族師範高等専科學校學報》第３期 6–10

鈴木博之 & ツェリ・ツォモ [Tshe-ring mTsho-mo] (2007)「カムチベット語維西 [Melung] 方言の r 化母音とその来歴」『京都大学言語学研究』第 26 号 93–101

Bartee, Ellen Lynn (2007) *A Grammar of Dongwang Tibetan*, doctoral dissertation, University of California at Santa Barbara

Hongladarom, Krisadawan (1996) Rgyalthang Tibetan of Yunnan: a Preliminary Report, in : *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 19.2/Fall, 69–92

—— (2007) Grammatical Peculiarities of Two Dialects of Southern Kham Tibetan, in : Roland Bielmeier & Felix Haller (eds.) *Linguistics of the Himalayas and Beyond*, 119–152, Mouton de Gruyter

Sun, Jackson T.-S. (2003) Phonological Profile of Zhongu: A New Tibetan Dialect of Northern Sichuan, in : *Language and Linguistics* 4.4, 769–836

Suzuki, Hiroyuki (2008a) *Linguistic Geography for Multicoloured Tibetan Dialects of Yunnan —— Preliminary Report ——*, unpublished manuscript presented at the Chula-Japan Linguistics Symposium (Bangkok)

—— (2008b) *Development of the Affricate Series in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 14th HLS (Göteborg)

—— (2008c) */l/ - /j/ Interchange in Shangri-La Tibetan*, unpublished manuscript presented at 41st ICSTLL (London)

Zhang, Jichuan (1996) A Sketch of Tibetan Dialectology in China: Classifications of Tibetan Dialects, en : *Cahiers de Linguistique - Asie Orientale* 25 (1), 115–133

丁任重主編 (2006)《中国大香格里拉経済圏研究》西南財經大學出版社

格桑居冕 [sKal-bzang ’Gyur-med] (1985)〈藏語巴塘話的語音分析〉《民族語文》第 2 期 16–27

格桑居冕・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社

—— (2004)《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社

李菊芳 (2008)《香格里拉文化研究》雲南人民出版社

陸紹尊 (1990)〈藏語中甸話的語音特點〉《語言研究》第 2 期 147–159

—— (1992)〈雲南藏語語音和語匯簡介〉《藏學研究論叢》第 4 輯 120–131 西藏人民出版社

斉扎拉 (2003) 〈建設香格里拉（代序）〉勒安旺堆主編《迪慶藏族自治州誌（上）》6–13 雲南民族出版社

孫宏開等 (2007)《白馬語研究》民族出版社

《雲南省誌》編纂委員會 (1998)《雲南省誌　59　少数民族語音文字誌》雲南民族出版社

雲南省中甸県地方誌編纂委員會編 (1997)《中甸県誌》雲南民族出版社

張怡蓀主編 (1993)《藏漢大辭典》民族出版社

[付記]

筆者による現地調査については、平成 16–20 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (S)「チベット文化圏における言語基層の解明」（研究代表者：長野泰彦、課題番号 16102001）および平成 19–20 年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」の援助を受けている。

なお、迪慶州における調査に当たっては昆明市の瑪吉阿米・香格里拉藏族風情宮の関係各位の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

付録：言語地図における地名と地点

本稿の言語地図の設計は、鈴木 (2007b) と同じである。

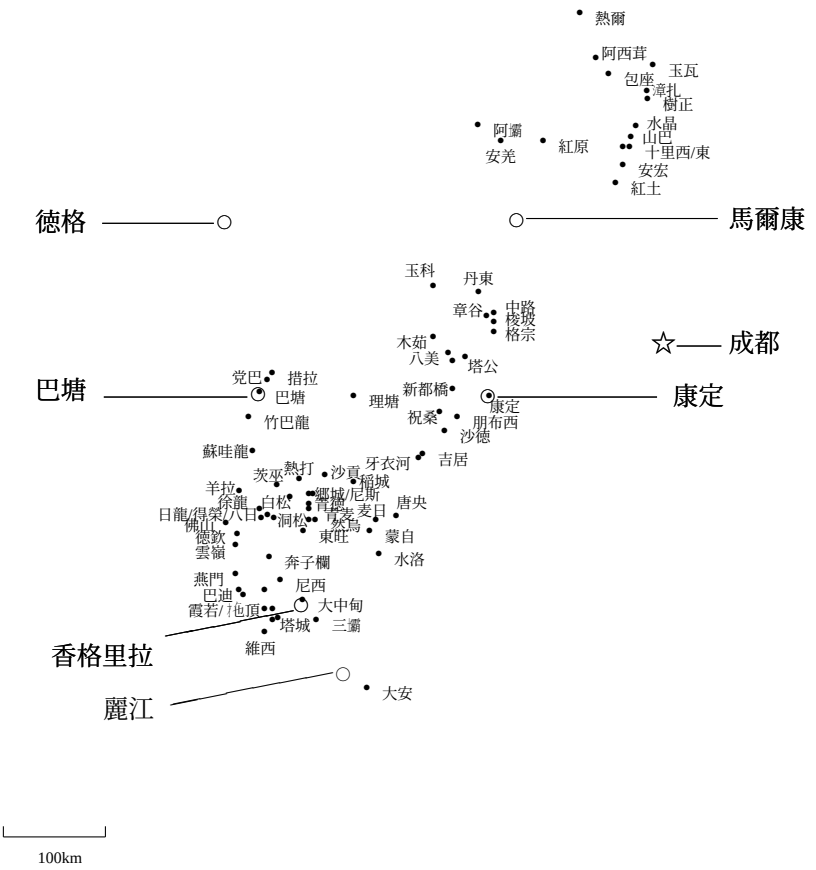

図 6: 言語地図に記載される地点（最大）

鈴木 (2007b:55) の地図にさらに地点の指標として「麗江」を入れ、以下の地点が新たに追加されている。

漢語名	方言名	方言分類	分布位置
丹東莫斯卡	Mroha	アムド	甘孜州丹巴県丹東郷莫斯卡
康定	Dartsendo	カム	甘孜州康定県爐城鎮
塔公各日馬	Gongrima	アムド	甘孜州康定県塔公郷各日馬
朋布西	Phungposhis	カム	甘孜州康定県朋布西郷
吉居	Jieju	カム	甘孜州康定県吉居郷
牙衣河	Nyayulzhab	カム	甘孜州雅江県牙衣河郷
竹巴龍	Grupalung	カム	甘孜州巴塘県竹巴龍郷
白松	sPunsum	カム	甘孜州得榮県白松郷
八日	mPhagri	カム	甘孜州得榮県八日郷
水洛	Zholu	カム	涼山州木里県水洛郷

三壩	Sanba	カム	迪慶州香格里拉県三壩納西族郷
佛山	Foshan	カム	迪慶州徳欽県佛山郷
巴迪結義	Budy (Jieyi)	カム	迪慶州維西県巴迪郷結義村
巴迪羅通	Budy (Lothong)	カム	迪慶州維西県巴迪郷羅通村
霞若	Byagzhol	カム	迪慶州徳欽県霞若傈僳族郷霞若村
霞若石茸	Byagzhol (Shizong)	カム	迪慶州徳欽県霞若傈僳族郷石茸村
塔城	mThachu	カム	迪慶州維西県塔城郷倮洛村
塔城其宗	mThachu (Qidzong)	カム	迪慶州維西県塔城郷其宗村
大安	Daan	カム	麗江市永勝県大安彝族納西族郷

ただし、巴迪結義 Budy (Jieyi) の地点は鈴木 (2007b) の「巴迪 Budy」に、霞若 Byagzhol の地点は同論文「霞若 Xiaro」に、塔城其宗 mThachu (Qidzong) の地点は同論文「塔城 Tacheng」に同じである。

また、次のものは方言名を差し替えた。

拖頂：Toding から Thoteng

以上に言及したものを除く方言については、以下に本稿中で用いる方言名表記と地名（前ページ地図に記載）を以下に対照させて示す。配列はおおよそ分布地域にあわせて北から南に並べてある。

gZari : 熱爾	gYokhog : 玉科	nDappa : 稲城
Askyirong : 阿西茸	sProsnang : 中路	Mundzin : 蒙自
Babzo : 包座	Branggo : 章谷	Sagong : 沙貢
gZhungwa : 玉瓦	Sogpho : 梭坡	Nyersul : 尼斯
gTsangtsa : 漳扎	dGudzong : 格宗	Chaphreng : 郷城
Phyugtsi : 樹正	Morim : 木茹	Phrengto : 青徳
rNgawa : 阿壩	Basme : 八美	Phrengme : 青麦
Anchams : 安羌	Lhagang : 塔公	gDongsum : 洞松
dMarthang : 紅原	Rangakha : 新都橋	Ragwo : 然烏
Amphel : 水晶	Sabde : 沙徳	Rwata : 熱打
Hamphen : 寒盼	Grongsum : 祝桑	Tsiu : 茨巫
sKyangtshang : 山巴	Lithang : 理塘	sDerong : 得榮
Ketshal : 十里/西	mBathang : 巴塘	Zholung : 徐龍
Thangskya : 十里/東	Sowanang : 蘇哇龍	Zulung : 日龍
Serpo : 安宏	Dangba : 党巴	Muli : 麦日
Hongtu/Zhongu : 紅土	mTshola : 措拉	Thangyang : 唐央

rGyalthang : 大中甸	gYagrwa : 羊拉	Budy : 巴迪
gTorwa : 東旺	nJol : 徳欽	Melung : 維西
Nyishe : 尼西	Yungling : 雲嶺	
sPomtserag : 奔子欄	Yanmen : 燕門	

なお、朋布西 Phungposhis 方言および沙徳 Sabde 方言の 2 つについては、調査協力者が母語としてムニャ語とチベット語の 2 言語を併用できる。そのチベット語口語形式を一次資料としている。

Analyse de la géographie linguistique des mots ‘cœur,’ ‘soleil’ et ‘lune’ en tibétain

—— concernant la relation entre “Xianggelila” et *sems kyi nyi zla* ——

Hiroyuki SUZUKI

sommaire

On dit que le mot “Xianggelila [香格里拉]” est une transcription phonétique de celui en tibétain *sems kyi nyi zla* ‘le soleil et la lune dans le cœur’ en caractères chinois. Le jugement linguistique de cette logique, cependant, n’est pas encore présenté. Donc, on doit expliquer les deux points suivants :

1. correspondance entre chaque morphème et la forme transcrite
2. correspondance précédente seulement recouvert dans le dialecte de la préfecture de Diqing

Cet article traite l’analyse de trois mots tibétains ‘cœur,’ ‘soleil’ et ‘lune’ avec la création des cartes linguistiques des dialectes parlés dans le couloir ethnique à l’ouest du Sichuan.

Le but principal de cet article, cependant, est un essai de la discussion avec la carte linguistique, et les trois mots ‘cœur,’ ‘soleil’ et ‘lune’ ont un caractère différent respectivement, donc, on indique ici trois discussions du point de vue de la géographie linguistique tibétaine.

L’essentiel de la carte linguistique concernant les trois mots est suivant :

‘cœur’ : différence de la racine et de la forme orale

‘soleil’ : différence de la forme orale dont la racine est presque pareille

‘lune’ : différence du morphème de la composition lexique et de la forme orale

Selon le résultat de l’analyse, on peut confirmer que la correspondance orale du mot *sems kyi nyi zla* qui est similaire à la forme orale chinoise “Xianggelila” se retrouve dans les dialectes tibétains parlés dans la préfecture de Diqing, c’est-à-dire, Xianggelila actuel.

（受領日　　2008年6月10日）
（受理日　　2008年11月21日）